

探訪ルポ ● 錦光園握り墨体験

「文房具」の本来的な役割として「文字を書くということ」を挙げる人は多いであろう。中国では古くから、文房具の元として「文房四宝」という言葉が存在する。これは書道において重要とされる墨・筆・紙・硯を指す言葉で、まさに文房具が「書くこと」を基本としていることを表している。私たちは、その中でも奈良市という土地ともかかわりの深い「墨」に注目した。墨にまつわる体験を、ということで、市内の職人さんの元を訪ねることになった。



今回私たちが訪問したのは、JR奈良駅から徒歩3分、三条通りの横道に入ったところにある和風の一軒家、奈良墨の老舗「錦光園」である。ここでは昔ながらの製法のまま、ひとつずつ手作りの固形墨を製造し直売も行っている。

古の香り漂う工房で、生の墨を握って作る「にぎり墨」の製作体験と工房の見学をさせて頂いた。さらに、ご主人の長野墨延さん（65）にお話を伺った。

◎墨職人さんに教えていただいたこと

1) 墨について

墨の歴史は2200年前の中国にまでさかのぼる。硯・筆・紙とともに「文房四宝」に数えられる墨は、文房具の中心として最も重要なものとされていた。日本には飛鳥時代、朝鮮・高句麗から曇徴（どんちょう）が伝えたといわれ日本書紀に記されている。

奈良墨の歴史は室町時代に始まる。興福寺二諦坊で初めて作られ、その後も寺社と深いかかわりを持ちながら製作が続けられた。江戸時代には奈良墨は約70の工房で作られ、200人の職人がいた。

現在では墨屋は奈良市内に7社あり、墨を木型にはめこむ10人の職人が、日本の墨の約90%の製造を担っている。奈良の墨は地場産業としてはもちろん、東洋文化の粋として、世界中の関心を集めている。

2) 墨の材料



墨の材料は煤・膠(にかわ)・香料の3つである。アカマツからできる松煙と、ごま油・菜種油・ツバキ油など植物性の油からできる油煙の2つがあり、ほとんどの墨は油煙から作られている。墨の粒子が細かければ細かいほど集めることが難しくなるため、高級になる。膠とは接着料のことで、湯せんで4～5時間溶かして使用されるが、これは動物性の接着剤であるので少々嫌なにおいが発生する。そのため香料を用い、においを抑えている。各墨屋はこの香料にこだわっており、特徴が出る。

3) 墨づくりの手順

①木型に油を塗る (図1)

②生墨を練る…練ることで中の空気を抜いている。空気が抜けていないと固まった時に割れてしまう。またスピードも大切で、ゆっくりしていると墨が固まってしまう。

③天秤で重さを量る (図2)

④左右同じ太さ、木枠にぴったりはまる長さになるように練る (図3)

⑤上から万力で押さえつけ、その後型抜きする (図4-1・2)



図 1



図 2



図 3



図 4-1



図 4-2

⑥4ヶ月後には固まり、30%ほど小さくなる (図5)。

⑦2、3年熟成したら小売りが可能となる。

◎握り墨体験



図 6

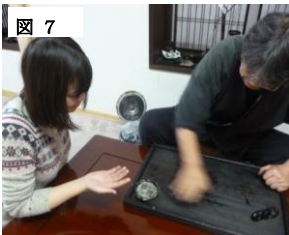


図 7

体験教室では、事前予約の段階で墨の材料である油煙、

膠、香料を混ぜた墨の原料が用意されている (図6)。これをまず職人さんが素早く練っていく。必要な分量を即座に判断、取り出して練り上げる様はまさに職人技である (図7)。この墨を練る作業が墨づくりにおいてもっとも難しく、適切な力を加えなければつるんとした表面にはならず、ひび割れてしまうそう。

練ったものを棒状に伸ばし、油を塗った体験者の手の上においてもらう (図8)。体験者がこの墨を握りこむことで自分の指紋や指の形のついた、世界でたった一つの墨が出来上がるのである。



図 5



図 8

出来たての墨はまるでマシュマロのような感触で弾力があり、触ると「うにっ」と指が入り込む不思議な感覚を味わうことができる。



図 9-1



図 9-2



図 10-1



図 10-2

「あなたたちにとって一番価値のある墨だ」。墨延さんの言葉が強く印象に残っている。

※ ※ ※

同じ要領で墨を握っても、手の形や力の加え方が異なるため全く違った形状に仕上がるということが握り墨のおもしろい点である(図9と図10)。生の墨を手で握った瞬間の柔らかさや香り、暖かさが、なんとも魅力的であった。

出来上がった墨は桐箱に入れてその場で持ち帰ることができる(図11と図12)。ただしこの時点ではまだ墨は柔らかい状態であり、これを2~3か月乾燥させると、普段私たちが目にする固い墨となるようだ。



図 11

デジタル化が進んだ現代にあっても、未だアナログである手書きの文字が廃れることはない。重要書類などのサインは、今でももちろん手書きである。それは手書きの文字、つまり筆跡が人それぞれの個性を持っているからだ。墨で書いた文字の価値のひとつもまたここにあるといえる。

書道だけでなく、茶道など〇〇道と名のつくものは、その完成品だけでなく、行う過程にも重きをおく。書道では書かれた文字だけでなく書くに至る過程、つまり墨に触れ、硯で磨るプロセスにも意味がある。故に墨のもつ価値が無くなることはない。

かつては身近であったが今は墨に触れる機会の少ない私たち。墨のもつ不思議な魅力である温かみ、「字を書くこと」の温かみを教えてくれる貴重な体験であった。

【謝辞】お忙しい中丁寧に対応して下さった錦光園様、長野墨延様には心より御礼申し上げます。

●訪問・取材：太谷梓美、高田沙織

●訪問日時：2012/12/19 14:30~15:30

●訪問先：錦光園 〒630-8244 奈良市三条町 547 (<http://www5.ocn.ne.jp/~narazumi/>)



図 12

奈良女子大学文学部人文社会学科文化メディア学コース編
(2012年度後期「文化社会学演習」報告書)

『文房具—ぶんぐ大学への招待—』

2013年8月12日発行

編集・発行 奈良女子大学文学部 人文社会学科
文化メディア学コース (小川研究室)

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 電話&FAX 0742-20-3259

E-mail ogawax@dream.com

印刷 株式会社 実業印刷